|  |
| --- |
| 手話花子（2023）『第49回日本手話学会大会予稿集』 xx–xx． |
| 　　 |
| 『大会予稿集』 原稿執筆ガイドライン |
| 　　 |
| 原稿の仕様について |
| 　　 |
| 手話 花子1　指文字 太郎2　非手指 操3, \* |
| 1日本手話学会理事会　2日本手話学会事務局　3日本手話学会編集委員会　**\*** *Corresponding Author* |
|  |
|  |
| 「大会予稿集原稿執筆ガイドライン」（令和3年4月13日更新）は、『手話学研究』に投稿するための原稿の大まかな仕様を示したものです。手話学の学際性に鑑み、本ガイドラインにみる仕様を絶対的なものとはしませんが、弊会編集委員会および事務局の負担を緩和するためにも、できる限り本ガイドラインに準じて原稿をしたためてくださるようお願いします。なお，本ガイドラインは執筆ガイドラインに従って記されていますので，このWordファイルを原稿のテンプレートとして用いることもできます。（日本手話学会編集委員会） |
| 　　 |

１．原稿の体裁および分量

1.1　保存形式

投稿原稿はMS Word形式で保存されたファイル (拡張子docx) を用いる。また、学会ホームページに掲載されている投稿用MS Wordテンプレートの利用を推薦する。

1.2　分量上限

原稿の分量上限は、下記の仕様にしたがい、２頁とする

1.3　サイズ、余白、ヘッダ、フッタ、およびチェック

原稿のサイズはA4とする。原稿の余白は下記の通りとする。上25 mm、下25 mm、左25 mm、右25 mm。ヘッタおよびフッタの設定は下記の通りとする。 (1) ヘッダ：端からの距離10 mm、9ポイント 中央揃え、(2) フッタ：端からの距離10 mm、9ポイント、中央揃え。

「段落」「インデントと行間隔」にある「行頭の記号を1/2の幅にする」をチェックする。

游明朝および游ゴシックを用いるときは、「段落」「インデントと行間隔」にある「1ページの行数を指定時に文字を行グリッド線にあわせる」のチェックをはずす。

２．原稿の構成

原稿は表題、副題、氏名、所属、要旨本文、参考文献の順に記す。

2.1. 書誌情報、種別、表題、氏名、所属

表題、副題、氏名、所属は、1段組、行間1行で記す。

表題は左詰め、HGP創英角ゴシックUB、左詰め、22ポイントで記す。副題がある場合は、表題の次の行に左詰め、UDデジタル教科書体NK-R、左詰め、12ポイントで記す。

著者氏名は左詰め、UDデジタル教科書体NK-B、12ポイントで記す。苗字と名の間は半角空けにする。所属は左詰め、UDデジタル教科書体NK-R、10ポイントで記す。連名の場合は氏名の間は全角1字空けにする。ラテン文字表記同士の間の場合は2文字空けにする。連名の所属が異なる場合、氏名の語尾にアラビア数字、上付きで記し、所属を記した行でそれぞれの所属の語頭にアラビア数字を記す。

Corresponding Authorは、Corresponding Author である氏名の語尾に「\*」、上付きで記し、所属を記した行の最後に「\* Corresponding Author」と記す。

2.2.　要旨

要旨は1段組、行間1行で記す。要旨はUDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。要旨の分量上限は8行とする。

2.3.　本文

本文および参考文献は2段組、行間1行で記す。本文は両端揃え、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。句読点は「、」と「。」を用いる。ただし、日欧混在文等においては適宜、「，」ないし「．」（半角）を用いることができる（英文の場合は [,] [.]）。

本文の章名は両端揃え、UDデジタル教科書体NK-B、9ポイントとする。章名の次に空白の1行を加える。章より小さな項目の見出しは両端揃え、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。章より小さな項目の見出しの次に空白の行はおかなくてもよい。

文献関連情報は本文中に記す。記すときは、原則として著者姓（西暦刊行年 : 該当ページ）の形式を用いる。

（例）山田（1930: 135）は～

（例）～（Jakobson 1942：54）。

また下記の機能は使用しないものとする。（1）インデントの自動設定機能を使用しない。（2）箇条書きの自動設定機能を使用しない。（3）段落番号の自動設定機能を使用しない。

３．注

注（脚注）はMS Wordの脚注機能を用いる。脚註は行間1行、両端揃え、UDデジタル教科書体NK-R、8ポイントで記す。本文中に加える注の位置はアラビア数字で記す。

ただし、脚注に不都合がある場合は、文末注の仕様にすることができる（MS Wordの文末脚注機能は用いないものとする）。本文の次に空白の1行を加えた後、文末注の章名を両端揃え、UDデジタル教科書体（NK-B）、9ポイントで記し、さらに次の行より両端揃え、ぶら下げ1字、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。

４．謝辞

謝辞を加えることができるものとする。謝辞の仕様は本文ないし文末注の次に（参考文献の章の前に）、空白の一行を加え、参考文献の章と同じように記す。

５．参考文献

参考文献は両端揃え、ぶら下げ2字、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイント（あるいは8ポイント）で記す。参考文献は著者名，発行年，題名，出版社（欧文の場合はその前に出版社がある都市名を併記）の順に、欧文の書名はイタリック体で記す。さらに著者の姓のローマ字順に記す。ただし、参考文献の記述仕様は著者が慣れ親しんでいるもので差し支えないものとする。

（例）

指文字太郞（2020）「指数字と指文字」『手話学研究』1(3)：1–10．

手話花子･指文字太郎（2000）「日本手話」非手指操編『日本手話』日本手話出版社：10–80．

Shuwa, Hanako, Taro Yubimoji & Misao Hishushi (2000) “Japanese Sign Language,” *Japanese Sign Language Japan*, 30(1): 10–30.

Yubimoji, Taro (2000) *Japanese Sign Language*, Kyoto: Nihon Shuwa Gakkai.（＝手話花子訳（2020）『日本手話』日本手話出版社．）

６．図

図は本文中の適当なところに置き、図それぞれに一連番号、題、および説明文（図の下）をつける。一連番号および題は図の下に、両端揃え、UDデジタル教科書体NK-B、9ポイントで記す。説明文は題に1字空けで続け、両端揃え、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。

７．表

表は本文中の適当なところに置き、表それぞれに一連番号、題、説明文（表の上）をつける。一連番号および題は表の上に、両端揃え、UDデジタル教科書体NK-B、9ポイントで記す。説明文は、表の下に両端揃え、UDデジタル教科書体NK-R、9ポイントで記す。